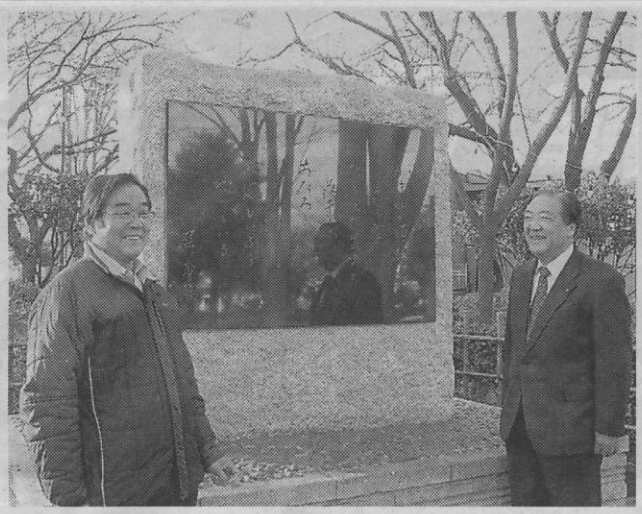
たきびだ 焚き火だ 豊田駅♪

発車合図に日野ゆかりの童謡、あすから

日野市ゆかりの童謡「たきび」が、23日から市内のJR中央線豊田駅で発車を知らせるメロディーに採用される。地元住民らが4年前からJRや市に働きかけ、実現した。メロディーの演奏は市幹部職員。「イメージに」と録音した演奏が、そのままホームで流れることになった。住民らは「心温まるとても良い出来栄え」と歓迎している。（岩城興）



童謡「たきび」の詩碑の前で喜びを語る「たきび会」会長の井上正一さん（左）と、「旭が丘商工連合会」会長の村上義輝さん＝日野市の旭が丘中央公園

市職員の演奏放送

♪かきねの垣根のまがりかど たきびだ 焚き火だ 落ち葉たき――。

「たきび」は岩手県出身の童謡詩人、巽聖歌（1905～73）が41年に作詞した。聖歌は48年から亡くなるまで、豊田駅が最寄りの日野市旭が丘で暮らした。

地元で聖歌を顕彰する「たきび会（詩人巽聖歌を称える会）」（井上正一会長）が98年に発足、翌年には旭が丘中央公園に「たきび」の詩碑が建立された。4年前から「旭が丘商工連合会」（村上義輝会長）も地域行事「たきび祭」を開催している。

2005年暮れ、隣の八王子駅で、八王子に住んでいた中村雨紅作詞の「夕焼小焼」が発車メロディーになった。これをきっかけに、地元でも「『たきび』を採用できないか」との声が上がり、たきび会と商工連が市やJRへの要望活動を始めた。

たきび祭などを通じ住民の間に機運が次第に高まり、昨年9月には約1カ月で約2300人分の市長あての署名が集まった。市がJR八王子支社と交渉し、11月中旬にメロディーへの採用が決まった。

次はメロディー作り。「曲のイメージの参考に弾いてほしい」。同下旬、市の窓口となった産業振興課の担当者が、上司のまちづくり部長、関田和男さん(60)に頼んだ。

関田さんは小学生時代からピアノを始め、市の行事などで腕前を披露することも多かった。キーボードを市役所に持ち込み、即興で曲調を変えながら、4、5種類弾いた。テンポは軽快に、伴奏を抑えめにしてメロディーを際だたせたという。

曲をパソコンに取り込み、JR側に送信したところ、「このままで大丈夫」の返事。二つが上下の各ホームで使用されることが決まった。

市は当初、プロに依頼する予定で、スタジオ・編集費を含む関連費用150万円を予算計上していた。自前で作ったおかげで126万円が浮いたという。関田さんは「軽い気持ちで弾いたので、（使われることに）驚いた。財政が厳しい折、費用が浮いたのはプラスでした」。

商工連副会長でたきび会理事を兼ねる田中三雄さん(61)は昨年暮れ、市役所に出向き、村上、井上両会長と関田さんのメロディーを試聴した。「市をあげて取り組み、メロディーまで作ってくれたので早く実現できたと思う。発車メロディーがこれからの地域発展の一つのきっかけになれば」と話す。

23日は午後0時54分発の上り電車で、初めて「たきび」が流れる。市長や地元関係者らがホームでメロディーを聞き、記念撮影をする。

都内13駅でご当地メロディー

青梅駅「アッコちゃん」など

JR東日本によると、これまでに「ご当地メロディー」が採用されているのは、都内13駅。うち多摩地区では八王子駅を含む5駅。

青梅赤塚不二夫会館の最寄り青梅駅は、「ひみつのアッコちゃん」（2005年3月～）を、西立川駅はミュージシャン松任谷（荒井）由実が同駅の光景を作詞作曲した「雨のステイション」（06年3月～）を使っている。他に武蔵小金井駅「さくらさくら」（06年4月～）、奥多摩駅「どんぐりころころ」（同）がある。

国分寺市でも4年前から、2駅でゆかりの信時潔作曲のメロディー採用を働きかけている。国分寺駅が、「♪運転手は君だ 車掌はぼくだ」の歌詞で知られる「電車ごっこ」、西国分寺駅が「一番星みつけた」。

地元商店会などに続き、市は昨年10月に要望書をJRに提出。著作権を持つ遺族とも話し合い、今年度内の実現を目ざしていた。しかし、交渉は今年に入って保留の状態に。「各地から要望が相次いだため、全社的に発車メロディーの在り方を検討することになったため」（JR八王子支社）という。

同市の担当者は「JRの回答を待って、また話を進めたい」と話している。